様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２７８５

研究課題名（和文）古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究

研究課題名（英文）The historical study of collocation composition and compound expression form of classcal Japanese

研究代表者
安部　清哉（ABE, Seiya）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：８０１８４２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：古典日本語の「連語」「詞辞複合表現」（以下詞辞連語）の①語構成、②通時的変化、③その傾向・法則を考究し次の成果を得た。
○世界初である詞辞連語の検索システム「日本語通時連語コーパス(DCCJ)を公開した（https://dccj yocjyet）。○詞辞連語の応用研究の有効性を『徒然草』の章段別文体研究で実証した。○一定の漢語語基に着目し複合語形・詞辞連語の幕末近代での意味変化と新漢語熟語の造語派生が連動すること、語彙史の中に「語基史」という新視点を提唱出来た。○詞辞連語が文学作品の解釈に有効である事を『徒然草』等にて実証した。○機能語の詞辞連語表現の体系的一覧表『現古機能語対照表』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
○世界初になる「詞辞連語表現」の検索システム「日本語通時連語コーパス」を公開した。「日本語通時連語コーパス(DCCJ: Diachronic Collocation Corpus of Japanese,https://dccj.yocjyet.dev/）。これは少なくとも国内初であり連語研究を飛躍的に進展させることができる。○刊行した『現古機能語対照表』がその検索に活用できる。○漢語研究にて語基という複合形態派生基本単位に着目する事で、日本語語彙史研究に「漢語語基史」という新視点を提唱出来た。○「詞辞連語表現」による研究が古典資料の分析に有効であることを『徒然草』『篁物語』等で実証できた。

研究成果の概要（英文）：The following results were obtained by investigating 1)word structure, 2) diachronic change, and 3) trends and rules of the "Rengo (as for collcation)" and "verb-phrase compound expressions" (as "verb-phrase compound expressions") of Japanese. The Diachronic Corpus of Collocations in Japanese (DCCJ), a world-first search system for diachronic collocations, has been released (https://dccj.yocjyet). The effectiveness of the applied research of the DCCJ was demonstrated in the Tsurezuregusa. The study focused on a certain Chinese word base, and elucidated the linkage between the semantic changes in the late modern period of the Edo period of compound word forms and verb-phrases and the derivation of coined words in new Chino-Japanese idioms. The study proposed a new perspective of 'word-base history' in the history of vocabulary.The effectiveness of research focusing on the "Rengo" in interpreting literary works was demonstrated in Takamura Monogatari.

研究分野：日本語学

キーワード：連語　コロケーション　語基史　語彙史　詞辞複合表現形式　語構成史　漢語史　複合辞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

代表者は、科研費も含め、20 年間の共同研究を経て、『日本古典対照分類語彙表』（共編）と『万葉集巻別対照分類語彙表』（協力者）とを完成させた。そこでは従来の品詞単位（短単位）と意味分類（シソーラス）とを掛け合わせたデータを公刊して、社会に提供した。これら古典シソーラスデータは国語研究所での古典歴史コーパスのデータベース作成にも生かされている。

また、それを利用した応用研究として、意味・形態および使用頻度などを双方向的に分析・考察した成果として、○安部清哉（2014.3）「シソーラスから見た昭和語彙（雑誌九十種）から平成語彙（雑誌 70 誌）への意味領域上の語彙変化」、○安部清哉（2013.6）「日本語語彙の歴史的構造変化とそこから見た和漢２文体の類型指標」などを発表していた。

その考察の過程で、品詞単位を超えた長い単位での考察が、現代語でも古典語でも不十分であることに気付き、さらに次のような研究でより明らかとなった。即ち、単語「途端」自体の研究はあるが、その連語形式の「～た・トタン」＜「～た・トタンに」＜「～。そのトタン」＜「～。トタンに」＜「～。そのトタンに」類の連語表現の比較はない。また、「途端」の用法と比較すると、「瞬間」「直後」「一瞬」「わずかの間」等が類義語だという語彙的研究はあっても、連語形式として把握する視点はなく、同じ意味を表すために「連語類型構文＝「～した（。）（その）■■■（に～）、～」という同一構文（連辞）内で使用されるという問題を考察する研究はない。（■■■部分に上記の各語が入る。）このような「長い単位」から語彙史を見ていく必要性は下記安部（2014）「名詞」「体言」を事例として「長単位化」について考察したことでより明らかになった。

○安部清哉他（2017）「接続機能語「とたん」（途端）の諸形式での時間感覚の長短比較――「Ｖた・トタン」＜「Ｖた・トタンに」＜「～。そのトタン」＜「～。トタンに」＜「～。そのトタンに」――」

○安部清哉（2017）「類義連語表現の文型形式から見た構文の類型について――連語構文類型構造論のための覚書――」

○安部清哉（2014.2）「名詞の変遷――通時的変化の諸相――」

古典語研究、和歌研究においても（和歌では掛け詞、類歌、本歌取り、序詞などで、連語や共起関係の長い単位での関語彙関連が一層問題になるから語彙）、長単位としての連語、共起語、複合形式から、古代人のイメージの網の目、語彙体系網を明らかに出来る。詞辞連語形式による調査は、古典作品の作者の解明にも役に立ち、類歌・元歌を見つけ出すことにもつながった。（「緑」＋「衣・袖（衣類語彙）」+「マイナス感情語彙」の共起。）

○安部清哉（2017）「原『篁物語』の作者・成立年と源順および沈淪歌壇歌人群の長歌・和歌」

このように、従来なら複合語や慣用句という制約ある範囲だった単位を、連語形態や辞も含めた複合形式（**「連語」「詞辞複合表現」即ち「詞辞連語表現」**と仮称）まで拡大させ、詞辞連語表現を収集し、形態・意味から一覧を分類し（辞書作成）、その活用法を探求しながら連語の特徴を解明していくという研究が、課題として残されていると考えられた。

２．研究の目的

語彙の史的研究で課題として残っている領域の１つは、「連語」「連語的形式」「複合的語構成（複合形態）」**（以下「詞辞連語表現」）**の研究である。

古典語で機能している「詞辞連語表現」の抽出法と研究法の開発が本研究の目的である。その通時的研究のために、○辞（助詞・助動詞）も含んだ**「詞辞連語表現」**の収集方法の開拓と一覧の作成、○「詞辞連語表現」の変遷を、特に古代語（中世前期）以前について、具体的資料や連語表現事例に関して、マクロ・ミクロ単位での実態調査を行うこと、を目的とする。

本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義は次のように設定した。

ア　従来の古典語研究の単位が、特に自立語では品詞単位であったものを、連語形態、辞と詞とも含む複合形式（仮称「複合詞」）まで拡大させ、研究の視点、単位を拡大させる点に独自の特色がある。

イ　調査対象単位をより長単位にすることは、古典語でも、辞レベルでは複合辞や機能語の研究として始まってきてはいるが、それを、詞（自立語）レベルを中心にして行う試みとしては、従来の研究を見渡しても、数少ない試みの１つとして独創的な方法と言えよう。

ウ　これまでの品詞的単語から考察してきた語彙の研究と、今回の「連語」「複合詞」による語彙（長単位語句）の比較によって、語のレベルでの運用と、長単位語句の間での運用の相違が明らかにできる。

エ　「連語構成・詞辞複合表現辞典」のデータと、現在研究の蓄積が進んで来ている複合辞データ、機能語データとを、一定の構文プログラムでつなぐことによって、古文の機械的作文や、現代語から／現代語への機械翻訳が可能になってくる。

本研究のもう１つの大きな目的は、そのような将来の機械翻訳のための「連語構成・詞辞複合表現辞典」データを作成していくための基礎的研究を蓄積することである。

３．研究の方法

申請時の計画に従い、当初は諸案を種々試行する時期もあったが、最終的には有効性を見出せるようになっていった、以下の３つの方法に絞り込んだ。

１つは「連語」「詞辞複合表現」（以下詞辞連語）を自由にフリー検索可能なコンコーダンスシステムを、自分で新規にプログラムして作成するという方法である。2 つ目は漢語熟語研究の分野を対象として、漢語の複合形態（接頭辞・接尾辞類を含む）を形成し派生させている大元の単位である漢語「語基」に焦点を絞り、その語基が新しい意味と新しい複合形態・派生形態（接辞付き）を新規に造語し、近代に大量に派生していくメカニズムを、「漢語語基史年表」を作成しながら詳細にトレースしていく方法である。3 つ目は、個々の古典文学作品を実践対象として選び、具体的な「詞辞連語表現」を手探りで検索して、個別に詞辞連語表現から、文体研究、年代研究、作品研究へと実践的に応用する方法である。以下に各々について簡潔に報告する。

１、「詞辞連語」のフリー検索可能なコンコーダンスシステム開発

従来の研究成果では収集でき（てい）なかった詞辞連語形式を新たに収集する方法についてはかなり試行錯誤することとなった。一定の成果を得た方法は、共起する一定の表現を経験的に見出し、テキスト上で様々な連接を想定して検索を繰り返すことで、通時的研究上有効な詞辞連語表現を見出していく方法である。この方法でも一定の成果を得ることができた（研究成果の内、『徒然草』の語彙・連語表現に関するものが該当する）。しかしこの方法はトライ＆エラー型で、アナログ的で非効率的で、少ない操作で大量収集とはいかなかった。辞書が既存のＤＢも、コーパス類でも十分ではなかった。試行錯誤の末に実現できた方法は、検索プログラムを独自に作成して、コーパスから自由に詞辞連語形式を規定（指定）できるコンコーダンスシステムの開発であった。この検索システムは「４研究成果」に詳述するように、まったく新しい検索システムであり、これによって従来とは全く異なる方式（条件設定）によって、自由に詞辞連語を大量データから検索することを可能にした。

２、「漢語語基」を語彙史研究の新たな単位として焦点を当て、その詞辞連語形式（熟語、複合形態、派生形態）の派生を通時的に解明する方法

従来の漢語語彙の研究の基本単位は１熟語に留まり、一つの漢語熟語の語史・語誌の解明が殆どだった。漢語語基の特にその意味変化に焦点を当て、新規の意味を担う語基が、どのような複合形式（熟語）・派生形式（接尾辞・接頭辞派生語）を造語して派生していくかを、特に新意味での「新漢語」について、ア初出登場時期、イ最初の使用者（使用国）、ウ初出資料の特性（辞書、翻訳語資料、新聞、科学書等学術書、文学か？）、翻訳語源外来語の有無などの観点から詳細に調査していく。また新意味で新たに造語していく新漢語の初出年代や初出資料の特徴の傾向を分析する。総合的にはそれら全体での新概念を担う漢語熟語を解明していく。

３、個々の古典文学作品を実践対象として選び、具体的な「詞辞連語表現」を手探りで検索して、個別に詞辞連語からの文体研究、年代研究等へ実践的に応用する方法である。『徒然草』の成立時期が異なる第Ⅰ部（序＋１～3２段）・第Ⅱ部（33 段以降）の文体的相違の研究、『篁物語』の第Ⅰ部・第Ⅱ部の成立時期研究および歌物語的章段と説話的章段間の文体研究が、実践的調査事例として取り行われ成果を上げることができた。

具体的には『徒然草』では種々の「詞辞連語表現」を探索し章段や部による用法の相違を分析し、中古語・中世語と比較してよりどちらに近い連語表現が確認できるかを調査した。結論としては、第Ⅰ部は中古語・中古の文体により近いいわゆる擬古文体となっているが、第Ⅱ部はほぼ中世語と中世文体と結論づけられた。これは従来『徒然草』全体を擬古文と扱っていた日本語学の通説とは異なり、章段によって区別する必要性を初めて指摘した研究となった。

４．研究成果

4-１　日本語通時連語コーパス DCCJ　https://dccj.yocjyet.dev/　実装完了

この DCCJ（Diachronic Collocation Corpus of Japanese）は詞辞連語表現の条件を検索側が自由に設定し、データ内のコーパスから文脈付で該当用例文を一覧として検索し、ダウンロード可能にした検索システムである。様々な時代のテキストを追加可能である。共起表現（連語）を検索し、通時的にも共時的にも検索しダウンロード可能してある。試験版での調査可能資料は徒然草、方丈記、宇治拾遺物語、十訓抄、平家物語、平治物語、保元物語である。特徴は、検索指定条件（一番上の記入欄）がほぼフリーに指定できる点である。例えば、以下の○部分は辞書的語形単位（単語）とすると、その部分に単語を自由に追記することであらゆる連語を指定できるだけでなく、また単語間（以下の○部分）に他の単語がいくつ挟まれるかという条件もほぼ自由に指定できるという点である。下記のように記載すると、間の○にそれぞれ１語挟まれていても、それを含めて連語表現を抽出し、かつダウンロードさせることができるようになっている（是非試しに検索してみていただきたい）。

検索連語指定小窓＝「たとえ＋○＋の＋○＋すれ＋ば＋○＋○＋とも＋○＋なり。」

概要＝本コーパスは、安部清哉の原案に基づき、指導学生・于拙（ウセツ）が設計・実装した日本語通時コーパス及びそれに付随する連語検索システムである（試験版）。下記画面参照。
于拙・安部清哉（2022）『日本語通時連語コーパス』 https://dccj.yocjyet.dev/

4-２　「漢語語基史」の研究

「漢語語基の辞書的意味記述」「漢語語基史年表」などを個々の語基で行い、「漢語語基史」研究の基本的ひな形を実践的に示した。その成果は、安部（2021）『明治初期理科教科書の近代漢語』ほかに集約された。

4-３　『現古機能語対照表』での連語的機能語（今後、上記 DCCJ での検索に語形が利用可能）

刊行した鈴木泰・安部清哉編（2020）『現古機能語対照表』の一部は以下のような形式である。この機能語（図中の「かと思えば～も」「にひきかえ」「にもまして」「に比べて」）を、上記 DCCJ の検索条件の連語表現として、今後組み込んでいき、検索効率を上げることが可能である。

1-3.対比	017	かと思えば～も	深く考えをめぐらし、表面を飾っていることは、男の知恵よりもまさっているかと思えば、そのことが、すぐ後からばれてしまうことも知らない。	かと思へば～を	深くたばかり飾れる事は、男の智恵にもまさりたるかと思へば、その事、あとよりあらはるるを知らず。	徒然	165
1-3.対比	018	にひきかえ	それにひきかえて、このようにご親切に配慮してくださるご恩徳をさえ、	ひきかへて（副詞）	ひきかへて、かくねんごろに顧みたまふ御徳をだに、	落窪	293
1-3.対比	019	にもまして	名高いかの清涼殿での演奏時にもまして、比べるものもない、面白く明朗な演奏である。	にすぐれて	音高き、清涼殿にて弾きたまひしにすぐれて，世になく面白く明らかなり。	宇津保	③595
1-3.対比	019	にもまして	かえって両親にもましてご配慮くださる。	にまさりて	なかなか親たちにまさりて。	落窪	326
1-3.対比	019	にもまして	今日からは、以前にもましてもったいなく存じます」	まして（副詞）	今日よりは、ましていとかしこくこそ」	宇津保	③616
1-3.対比	020	に比べて	なんとも悲しいこの世の中は、寝ている間に見る夢に比べて劣らぬ有様である。	に	あはれなる世の中は、寝るが中の夢に劣らぬさまなり。	栄花	①460
1-3.対比	020	に比べて	始めから中納言と離れて住んだのに比べて、この境遇はよくないなあとはお思いになるけれど、	には	もとより住み離れなましには、劣ることかなとおぼせど、	浜松	273

4-４　個々の古典文学作品の実践的分析

『徒然草』では種々の「詞辞連語表現」を探索し章段や部による用法の相違を分析し、中古語・中世語と比較してよりどちらに近い連語表現が確認できるかを調査した。結論としては、第Ⅰ部は中古語・中古の文体により近いいわゆる擬古文体となっているが、第Ⅱ部はほぼ中世語と中世文体と結論づけられた。これは従来『徒然草』全体を擬古文と扱っていた日本語学の通説とは異なり、章段によって区別する必要性を初めて指摘した研究となった。

4-５　「連語の発達」「漢語語基の新熟語派生」を新たに語彙史上に位置づけた（安部清哉 2020）

表５－５　語構成における「多音節化・複合語化」から見た語彙史（「長単位化」の語彙史）

史前	１音節語・２音節語が基本　エ（枝・柄・絵・餌・江・重 etc.），モル（守）
上代以前	派生語・複合語の発生　エダ（エ（枝）＋タ（手）），守る（マ（目）＋モル（守））
上代	３音節語・4 音節（以上）語の増加（枯れ枝，見守る），和語の多音節語の登場（歌という「文体」条件での臨時一語的歌語―夕波千鳥）
中古（中期以降）	形容詞の複合語の増加（ものこころぐるし）
中世（前半）	動詞の複合語の増加　漢語の複合語の増加　**【連語の発達】**
中世（後半）	動詞複合語の定着
近世	和語の長い複合語の増加，臨時一語的な語句の増加 **漢語語基の新熟語派生増加**（おもてあそびもの＞おもちゃ，「独活の鱠の柚車（←淀の川瀬の水車）」，「お茶漬けさらさの風呂敷包み」，「『弔い道具の龍頭』という面だ」，旧日本古典文学全集，所謂地口の例など．『其小唄恋情紫（そのこうたひよくのむらさき）』『花名所懐中暦』（春水，題名），臨時一語的なものも含む）
近代	漢語の長い複合語の増加「文部省教科用図書調査委員会」「全日本学生自治会総連合」（全学連），臨時一語的語の増加「申し込み受け付け締め切り日」
現代	外来語の複合語の増加　インフォームド・コンセント，セカンド・オピニオン，モラル・ハザード，ビジネス・ランチ

本研究の成果の１つとして、上記語彙史年表（安部清哉（2020））の中に「**連語の発達**」「**漢語語基の新熟語派生**」を新たに位置づけることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計32件（うち査読付論文　17件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 安部清哉	４．巻 20
２．論文標題 源順における漢から和――探韻から押韻の和歌そして歌の序の対句から“対の和歌”へ――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文　（学習院大学人文科学研究科）	６．最初と最後の頁 (95)-(134)縦
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部清哉・漢語演習学生	４．巻 24
２．論文標題 漢語語基の史的変遷と漢字の“気づかない近代化”――熱、社、状、誘、美、会、性、直、貴、収、酸、識――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東洋文化研究　（学習院大学東洋文化研究所）	６．最初と最後の頁 (43)-(92)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部清哉・有馬里佳	４．巻 18
２．論文標題 漢語語基および漢字の近代化と「胞」――エナからcellの翻訳語「細胞」へ――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 学習院大学日本語日本文学	６．最初と最後の頁 (17)-(34)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部清哉	４．巻 19
２．論文標題 変体仮名字母から見た一写本『篁物語』彰考館甲本――【附載】京都大学人文研究科図書館所蔵本「小野篁集」（影印）――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文（学習院大学人文科学研究科）	６．最初と最後の頁 横43－83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 67
2．論文標題 指示詞カ系派生語「かく」類語句と冒頭表現から見た平安前期物語『篁物語』――登場人物の対比構造がつなぐ第Ⅰ部と第Ⅱ部――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文学部研究年報（学習院大学）	6．最初と最後の頁 19－92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 18
2．論文標題 京都大学文学研究科図書館所蔵本『篁物語』（影印）とその“末尾有空白系統本”の古態性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人文	6．最初と最後の頁 13-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 3
2．論文標題 第5章　連語から見た『徒然草』――連語型文末機能語と文体――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 〈日本語の語彙3〉中世	6．最初と最後の頁 54-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 66
2．論文標題 『徒然草』の章段内容と分類――文体と語彙の分析資料として――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 学習院大学文学部研究年報	6．最初と最後の頁 87-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 1
2．論文標題 連語から見た『徒然草』第1 部・第2 部――接続機能表現のプレ近代化と文体――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論究日本近代語1	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉・川澄香奈	4．巻 16
2．論文標題 『徒然草』の連語『覚えし』と文体	5．発行年 2020年
3．雑誌名 学習院大学日本語日本文学	6．最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉・峰尾みやび	4．巻 63
2．論文標題 『徒然草』における「あはれ」の現れ方―― 第1 部・第2 部の文体と擬古的側面 ――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 学習院大学国語国文学会誌	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉・川口結	4．巻 6
2．論文標題 『徒然草』の連語「さも」と引用表現	5．発行年 2020年
3．雑誌名 学習院大学教職課程研究年報	6．最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓮井理恵・安部清哉	４．巻 22
２．論文標題 中川重麗著『博物学階梯』の諸本と構成（読本・教授本・字解）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化研究	６．最初と最後の頁 215-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺陽子・安部清哉	４．巻 22
２．論文標題 明治理科教科書執筆者としての「中川重麗」事績：明治20年まで	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化研究	６．最初と最後の頁 193-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤真梨子	４．巻 22
２．論文標題 近代の「特徴」と「特長」―同音類義語の意味侵食―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋文化研究	６．最初と最後の頁 167-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安部清哉	４．巻 16
２．論文標題 平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照――『竹取物語』（２）「形態が全く異なるもの」――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 学習院大学計算機センター年報	６．最初と最後の頁 79－97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 4
2．論文標題 挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成	5．発行年 2018年
3．雑誌名 学習院大学教職課程研究年報	6．最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 65
2．論文標題 贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という〝つくり歌物語〟の創出	5．発行年 2019年
3．雑誌名 文学部研究年報（学習院大学文学部）	6．最初と最後の頁 99～141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 17
2．論文標題 呼称から見た『篁物語』の段落構成――『せうと（兄）』と『男』の相補分布――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文　（学習院大学人文科学研究所）	6．最初と最後の頁 （55）～（77）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 95-6
2．論文標題 係り助詞（ナム・ゾ・コソ）の四文体別変遷史から見た『篁物語』―――源順原作説とも照らしつつ――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 3－20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 16
2．論文標題 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順――『篁物語』第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の一典拠章段として―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人文　（学習院大学人文科学研究所）	6．最初と最後の頁 59－85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 64
2．論文標題 形容詞語彙の語構成と通時的構造――蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』による研究の共有――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文学部研究年報（学習院大学文学部）	6．最初と最後の頁 59－85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤真梨子	4．巻 17
2．論文標題 語基『特』を含む漢語の幕末・近代における拡大	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『人文』	6．最初と最後の頁 115-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤真梨子	4．巻 62
2．論文標題 『改正増補　博物学階梯教授本』（1880）の語彙	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『国語国文学会誌』	6．最初と最後の頁 87-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蓮井理恵	4．巻 17
2．論文標題 『人文』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 近代漢語「自然物」「天然物」「天産物」「天造物」類の変遷と意味分析	6．最初と最後の頁 153－185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡辺陽子	4．巻 28
2．論文標題 『生』『活』を造語成分とし共通語基をもつ近代的類義二字漢語――『生計―活計』『生気―活気』等10組――」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 学習院大学人文科学研究論集	6．最初と最後の頁 ?―?
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 16
2．論文標題 「平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照――『竹取物語』（２）「形態が全く異なるもの」――」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『学習院大学計算機センター年報』	6．最初と最後の頁 79－97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 95-6
2．論文標題 「係り助詞（ナム・ゾ・コソ）の四文体別変遷史から見た『篁物語』―――源順原作説とも照らしつつ――」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『国語と国文学』	6．最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 224
2．論文標題 「書評：蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『萬葉』	6．最初と最後の頁 78-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 4
2．論文標題 「挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『学習院大学教職課程研究年報』	6．最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 64
2．論文標題 「形容詞語彙の語構成と通時的構造――蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』による研究の共有――」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『学習院大学文学部研究年報』	6．最初と最後の頁 59－85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安部清哉	4．巻 16
2．論文標題 「『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順――『篁物語』第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の一典拠章段として―」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『人文』（学習院大学人文科学研究所）	6．最初と最後の頁 （33）-（50）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 安部清哉
２．発表標題 幕末・近代漢語の増加の一側面――漢語語基（字音語素）の視点《意味と語構成》から―
３．学会等名 第119回漢字漢語研究会、2020年1月11日(土)（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 安部清哉
２．発表標題 近代の漢字「語基」（字音語素）から見る日本新漢語の広がり
３．学会等名 海域人文学コロキウムー第12回／主催:釜慶大学人文韓国プラス(HK+)事業団／後援: 教育部,韓国研究財団（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安部清哉・伊藤真梨子・蓮井理恵・渡辺陽子
２．発表標題 近代資料としての明治理科教科書・中川重麗『博物学階梯』―明治10年刊初版を中心に―
３．学会等名 第214回青葉ことばの会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安部清哉
２．発表標題 「係り助詞と『伊勢物語』と文体から見た源順原作『篁物語』」
３．学会等名 第207回青葉ことばの会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

1．著者名 鈴木泰・安部清哉	4．発行年 2022年
2．出版社 私家版（研究報告書）	5．総ページ数 170
3．書名 現古機能語対照表	

1．著者名 安部清哉	4．発行年 2021年
2．出版社 花鳥社	5．総ページ数 410
3．書名 明治初期理科教科書の近代漢語――中川重麗『博物学階梯』にみる実態[影印・翻刻・索引付]	

1．著者名 安部清哉編	4．発行年 2020年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 196
3．書名 シリーズ〈日本語の語彙3〉中世	

1．著者名 日本近代語研究会編	4．発行年 2020年
2．出版社 勉誠社	5．総ページ数 414
3．書名 論究日本近代語1	

１．著者名 沖森卓也、木村一、安部清哉、加藤大鶴、吉田雅子	４．発行年 2017年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 148
３．書名 日本語の音	

〔産業財産権〕

〔その他〕

○世界初になる詞辞連語の検索システム「日本語通時連語コーパス」を開発し公開した。「日本語通時連語コーパス(DCCJ: Diachronic Collocation Corpus of Japanese,試作版)（著作＝于拙・安部2022, ver.2.0)https://dccj.yocjyet.dev/）。
○本研究で新たに提唱した「漢語語基史」研究という語彙史・語構成史の新しい研究視点は、2023年度科学研究費基盤研究（Ｃ）の研究採用へと発展させることができた。
○また上記DCCJの改良版の開発研究は、2023年度学習院大学計算機センター研究ＰＪとして継続させることにつながった。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	伊藤　真梨子 (ITO Mariko)		
研究協力者	蓮井　理恵 (HASUI Rie)		
研究協力者	渡辺　陽子 (WATANABE Youko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関